St. Luke's Society for Nursing Research　2009. 11. 21　No.26

聖路加看護学会　ニュースレター

第14回聖路加看護学会学術大会を終えて　事務局の窓から……第14回聖路加看護学会学術大会を振り返って　第14回聖路加看護学会学術大会報告　プログラム実際の様子
参加者からの一言メッセージ　理事長挨拶　第14回聖路加看護学会総会の焦点　第15回聖路加看護学会学術大会のご案内　お知らせ　編集後記

●第14回聖路加看護学会学術大会を終えて

第14回学術大会長　**堀内　成子**

秋晴れのすがすがしい稲刈り月の最終土曜日に「ファーストクラスをめざす道－ケアの未来を拓く－」と題して第14回聖路加看護学会学術大会を開催しました。全国から多数皆様にご来場いただき、254人の皆様と共に朝９時の総会から夕方19時30分の自由集会まで多くの学びを得ることができました。学会員はじめ、聖路加看護学に興味を持ってくださる多くの方々に支えられ、無事終了することができましたことを心から感謝申し上げます。

聖路加の創設者であるトイスラー博士と同時代を生きた清里の父ポール・ラッシュ博士の言葉「Do your best, and it must be first class. 最善をつくせ、しかも一流であれ」を掲げ、この道に続く職業人になるとはどういうことかを考えようと企画いたしました。研究・教育・実践の分野で活躍なさっている第一線の演者からの Review Lecture（系統的な講義）と会場からの質問という形式で行いました。解釈的現象学、意思決定の支援、省察的成人教育、まったく別の概念のように思われていた研究・教育方法だと考えていましたが、「当たり前すぎて気づかれないことの意味を探る」という道標は共通しているように思いました。

お昼を食べながら最新トピックを聞くランチョンセミナー、続く２階ラウンジでの６群26演題のポスターセッションは一斉に発表がスタートし、まるで夏の熱気でした。

午後の教育講演は、卓越した実践の技を持つ大先輩からの教えに耳を傾けました。謙虚に自分のできるとこととできないことを見極め10年毎に区切り日々精進する誕生を支える技。あるがままに生きて迎える豊かな最期を支えるすばらしさを語る映像に感動の涙音が会場を満たしました。

自由集会では、CNS の集まりや認定看護師の集まり、助産の道60年の大先輩を囲んで活気溢れる夕食会となりました。

山田理事長が、聖路加看護学を追究する学会でありたいと総会で述べておられました。聖路加看護学の実践重視の哲学は、時に冒険であり困難が伴うと思います。学会の場での討議を通じて現状に変化をもたらす挑戦をすることが、創設者トイスラー博士の、またポール・ラッシュ博士の志に通じるのではないかと実感した１日でした。

●事務局の窓から……第14回聖路加看護学会学術大会を振り返って

「ユニークに、しかも楽しく、シンプルに」という大会長の意向をモットーに約１年をかけて、準備を行なってきました。

① 教育講演では、研究・教育・実践の分野をリレーで行ないたい。
② 教育講演は、新進気鋭の若手講演者と熟練ベテランの演者にお願いしたい。
③ 教育講演では、会場からの質問と回答という形式で意見交換をしたい。
④ 抄録集には、できるだけ講演内容がわかるパワーポイントを入れたい。
⑤ 一般演題の申し込みは、抄録提出と同時に１回にしたい。
⑥ 一般演題を一堂で見ることができるようにポスター発表の形式にしたい。
⑦ 一般演題に英語で司会と発表をするセッションを行ないたい。
⑧ 外国人特別留学生のために発表の機会を与えて、参加証を出したい。
⑨ 昼食を食べに外へ出かけない工夫をしたい。ランチョンセミナーの企画を行ないたい。
⑩ 聖路加で学んだ仲間が集う時間がほしいので夕方に自由集会を行なう。
⑪ 自由集会に夕食を提供したいので、その予算を獲得するために講演集に広告を載せたい。
⑫ 多くの学部学生に参加してほしいので、参加費を無料にしたい。
⑬ 大学院修了生にできるだけ発表するように声をかけたい。
⑭ ポール・ラッシュ博士とのつながりを持つ清里キープ協会を紹介する何かをしたい。
⑮ 企業展示は、できるだけケアに関連したものをお願いしたい。

などなど。

事務局は、４月以降に忙しくなり電話や FAX でのやり取りが増えていった。特に９月に入ってからは、実習の準備と重なって夜遅くまで連絡や調整に追われ、研究室には書類や文具・ダンボールが積まれていた。助産学研究室には教員を支えてくれる優秀な美人秘書グループがいて、郵便局の仕事や会計を担当してくれる人、ポスター・ランチョンセミナーのチケット・広告等アート担当の人、印刷担当の人など、多くの人々の助けが大きかった。また当日のボランティアは、ウィメンズヘルス・助産学専攻の大学院生が気持ちよく担ってくれた。当日参加が予想以上に多く、また学部生が12名参加してくれたことはとても嬉しかった。学会の討議に参加する楽しさを経験してくれたらいいなあと思う瞬間であった。多くの人々に支えられて開催できた第14回学術大会でした。

応援してくださったすべての皆様に心より御礼申し上げます。

大会事務局：聖路加看護大学　助産学研究室

プログラム実際の様子

午前中は大会長歓迎の挨拶に引き続いて、教育講演Ｉ〈研究〉がふたつ行なわれた。事前配布のプログラムでは演者が相良ローゼマイヤー氏であったが、ご都合で演者は司会予定であった田中美恵子先生に交替していた。

はじめに「解釈学的現象学」（Hermeneutics Phenomenology）と「解釈的現象学」（Interpretive Phenomenology）の違いについて定義され講義はスタートした。

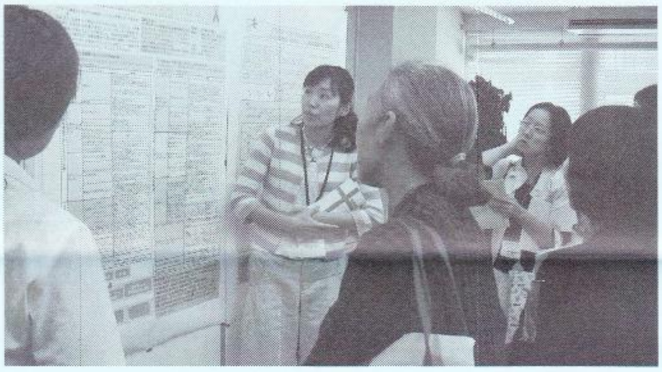
質的研究の底にある現象の「解釈」という営為は、もっともマニュアル化がなじまないと説かれ、なぜなら「方法論的態度」のことを言っているに過ぎないという回答であった。実証主義的立場と解釈的立場における科学哲学パラダイムの違いをおさえ、デカルト、フッサール、ハイデガー、ベナーと理論の特徴をわかりやすく要約してその潮流を解説してくださいました。ご本人は、「マンガ現象学」みたいな講義ですとの弁であったが、参加者からもひとり難解な書物を読み進む前に聞く道先案内のような講義で、もやもやが整理できたという声が聞かれた。

続いて辻恵子氏の講演は「概念分析からプログラム開発－困難な決定を支える－」と題して、遺伝カウンセリングと出生前検査を受けるカップルの苦悩に対する支援を題材にして丁寧な解説をしてくださった。聖路加看護大学大学院博士後期課程の必須科目にある理論看護学の中で行なわれる概念分析の実際を示した。Shares-Decision Making の概念分析結果から、当事者を主人公にした遺伝相談サポートプログラムを考案し、その評価を行なった研究プロセスの説明があった。参加者からは、大学院での教育の実際を知り、積み重ねていく研究のあり方を学んだという声が聞かれた。

次に、講堂から３・４階の教室へとお弁当付のランチョンセミナーに移動した。「MaIN を使ってあなたもファーストクラスの管理者になろう!!」（医学書院）、「母子の絆への HUG（抱きしめ）～カンガルーケアからタッチケア～」（ジョンソン・エンド・ジョンソン）、「植物療法の基礎と応用～看護領域での活用の可能性」（グリーンフラスコ研究所）、「頻尿・尿失禁のコンチネンスケア」（大鵬薬品工業）の４つに分かれた。各領域で高名な講師陣のお話を聞きながら、和やかに紅葉弁当を食べた。自分の持っている知識を最新のものに取替え、さらに未知の知識を加える楽しい時間であった。

あっという間に１時になり、２階ラウンジへと移りポスターセッションが６群一斉にスタートした。領域は、地域看護、助産学、基礎看護学、国際看護学、健康教育、看護教育学、看護管理学など広範囲にわたっていた。ラウンジに参加者のほとんどが参集してポスター発表を聞き入る時間帯であったため、まるでラッシュアワーのようであったが、発表者と質

教育講演への質問

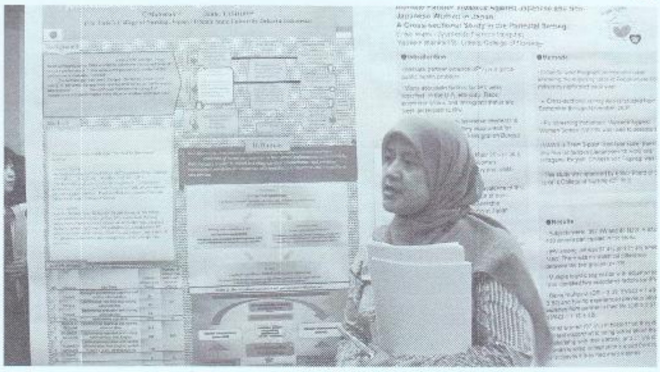


ポスターセッション

ランチョンセミナー

川越先生を囲んで

専門看護師の集まり



インドネシア留学生の発表

毛利種子先生と大会長の対談

問者との距離は近かった。第6群は英語を用いての発表と質疑が行なわれ、大学院外国人特別留学生も民族衣装で誇らしげに発表する姿が見受けられた。ポスターは、わかりやすく美しく工夫を凝らした力作ばかりであった。同じ会場で行なわれていた企業展示でもコーヒーを飲みながらにぎやかな交流が行なわれていた。

再び講堂へと移動して、教育講演II〈教育：省察的実践をめざす成人教育〉では、「おとなの学びを創る－省察的成人教育」と題して三輪建二先生の講演があった。実践の反復経験から育った暗黙の理解を明らかにするという Reflection-in-Action（行為の中の省察）の解説に続き、会場からの質問に対しては、職場においては「物語るカンファレンス」をもっと行なって省察的実践の場にしてはどうかと提案された。

教育講演III〈実践・熟練者による技の伝承〉では、毛利種子先生に大会長が質問するという対談形式で「誕生をささえるプロの技－産婆のこころと助産婦としての歩み－」と題して、60年の実践が静かに語られた。常に謙虚に主人公である産婦を脅かさないように存在するまるで「借りてきた猫」のようにひっそりと佇むケア。そして助産婦として研鑽するべきことは、時間をかけて努力して技を磨くという姿勢に、多くの参加者は襟を正す思いであった。

最後は「地域で最期まで生きることを支える」と題して、実践と研究を通じて在宅ホスピスを提唱してきた川越博美先生の講演であった。理解の得られない在宅ホスピス緩和ケアの普及に市民を巻き込んで「家で死ねるまちづくり」に奔走する姿があった。変化の前には必ず障壁があることを、それでも続けていく意味を語られた。心に残った患者さんのエピソードでは、人が最期まで自分自身を貫くことを支えることや家族が変化していく様子は感動的であった。またご自身の闘病経験から看護師にもっと必要なのは「説明力」であると激励した。

大会長閉会の辞の後、ラウンジで夕食をとりながらの自由集会が午後7時30分まで行なわれた。ひとつのグループは「これからの高度看護実践について話そう」と題して、厳しい医療状況における今後の役割について熱心に語りあっていた。全国規模の学会であるからこそ出会える時間であり、困難を抱えて奮闘している仲間の声を聴き勇気をもらえる貴重な機会であると再確認した。　（堀内　成子）

●参加者からの一言メッセージ

- 看護の心をアカデミックに思考する……。さすがは聖路加。ファーストクラスな一日になりました。（大阪府、37歳、TH）
- 今年は、久しぶりに、朝からびっしりと参加させていただきました。教育講演は、どれも、内容が濃く、まだ、お昼もランチョンセミナーがあり、選択肢も多く、本当に充実し、また、勉強になりました。ありがとうございました。（40代、KT）
- 大学卒業後、臨床で助産師をしていた16年、その後、大学教育に入ってから19年の内、2回欠席だけで、この学会参加をしている理由は、「なつかしさを伴った刺激」だと思っています。たった一日なのに看護学生に限らず、新人・スタッフ教育、子育て、介護、を育てていくエネルギーを東京からもらって元気になれる学会は数多くあれど聖路加看護学会（だからこそ）のみです。（大阪、50代、HO）
- 久しぶりに川越先生の元気なお姿を見ることができ、ユーモアあふれ実践知に富んだご講演を拝聴し、感激いたしました。

理事長挨拶

山田　雅子（聖路加看護大学）

理事長を仰せつかり、ようやく１年が過ぎました。井部副理事長を始め理事の先生方に強いサポートを頂戴しながら、理事会等を通して聖路加看護学会の歩を進めてまいりました。９月26日には、聖路加看護大学堀内成子教授のリーダーシップのもと、「ファーストクラスをめざす道－ケアの未来を拓く－」をテーマとする学術大会が開催されました。研究法に関するレクチャーや卓越した実践者の講演などを中心に、一日中、看護実践を語り合い、看護実践の理論化について学びました。

2010年度は本学会の15周年に当たります。一つの節目の時期を迎え、新規事業として、名誉会員制度の創設、看護実践科学研究助成基金の創設を計画いたしました。研究助成基金は皆様からお預かりしている会費から、会員の皆さまの研究費として使わせていただく計画です。初年度は100万円の研究助成基金を設けることを予算としてご承認いただいております。具体的な運用についてはこれから検討し、順次ご案内を申し上げます。

第15回学術大会は、聖路加国際病院副院長 佐藤エキ子先生に大会長をお願いいたしました。2010年９月25日の開催です。皆さまのご参加を心より楽しみにいたしております。これからも看護実践を重視した聖路加看護学を追及していくことを目的として、広く会員の皆さまの研究活動や医療現場の活性化を支援してまいりたいと考えております。今年度もどうぞよろしくお願い申し上げます。

■第14回聖路加看護学会総会の焦点

聖路加看護学会　森明子、佐居由美（庶務担当理事）

第14回聖路加看護学会総会は、2010年９月26日土曜日に出席者18名、委任状提出者248名により開会されました。学術大会長である堀内成子氏を議長として、2009年度の理事会・評議会、委員会等活動、2009年度決算等の報告がされました。また、2010年度の事業計画案および予算案について説明がなされ、総会の議題はすべて承認されました。

今年度の総会の焦点は、2010年度事業として提案された、「15周年事業：看護実践科学研究助成基金の創設」「名誉会員制度の創設」の２つの新事業です。「15周年事業：看護実践科学研究助成基金」は、繰越金の一部である100万円を特別会計として計上し、看護実践科学の発展に寄与する研究に対して経済的支援を行う目的で創設されました。2011年度以降は、年度の繰越金状況に応じて理事会にて予算額が提案されます。また、本事業は、学術交流委員会が担当し、2010年度に規定の検討・応募・助成を行います。「名誉会員制度」は、長年にわたって本学会に貢献された会員に対し敬意を表する目的で創設されました。名誉会員は、本会に多大な貢献をし（役員３期９年以上務めた者もしくは大会長を務めた者）、70歳以上であり、常勤の職務についていない（もしくは、これらに相当すると理事会が認めた）会員の方々が対象となり、理事会が推薦し総会での承認を経て、名誉会員の称号が贈られます。

これらの二つの事業にくわえ、2010年度事業案としては、第15回学術大会の開催、学会誌第15巻の発行、ニュースレター26，27号の発行、会員相互の学術的交流、学会組織強化の検討（2008年度の将来構想委員会の答申をふまえ、2010年度事業としても引き続き行う）、日本看護系学会協議会および看護系学会等社会保険連合への参加があります。

今後とも、本学会が看護実践科学の発展のみならず、広く社会に貢献できる学術団体として発展できるよう、会員皆様にご協力いただきたくお願い申し上げます。

第15回聖路加看護学会学術大会のご案内（第一報）

開催日：2010年9月25日（土）
会　場：聖路加看護大学
大会長：佐藤　エキ子（聖路加国際病院）
テーマ：（現在、卓越した看護実践に関連したテーマを検討中です）

学術大会事務局：〒104-8560東京都中央区明石町９－１
聖路加国際病院　看護管理室（高屋尚子）
FAX　03-3544-0649
e-mail：slnr15@luke.or.jp

聖路加看護学会は「会員相互の学術的研鑽および交流をはかることで、看護実践の向上と看護学の発展」という目的のもとに開催され、2010年には第15回目を迎えます。

この節目の年に学術集会を開催させていただくことになりました。15年前と現在とでは、疾病構造の変化とともに医療提供体制も大きく変化しています。また医療の対象者である患者さんの「医療サービス」に対する意識も高くなっています。それと伴に臨床現場における看護師の役割も多様化してきました。

このように多様化した看護サービスにおいて、臨床現場の「質の高い看護」実践への取り組みは必須といえます。また質の高い看護サービスを提供するためには実践・教育・研究の融合が不可欠であります。プログラムではこれらを基に、実践では看護の技術を中心に、教育では継続教育を中心に、また研究では看護学の発展に結びつく臨床研究と基礎研究との融合をめざしたトランスレーショナル・リサーチを中心に、それぞれの分野で活躍されている演者を迎え、講義およびディスカッションの形式を考えております。

詳細は決まり次第直ちに学会ホームページ他にてお知らせします。聖路加看護学会は、毎年さわやかな秋に開催されますが、今から皆様の秋の指定席の一つに入れていただき、当日の多くのご参加を心よりお待ち申し上げております。

お知らせ

★学術交流委員会

今年度の学術交流会は、『臨床家がなぜ博士課程で学ぶのか？－大学院教育のイノベーション－』というテーマでパネルディスカッションを開催いたしました。10月24日（土）午後、聖路加看護大学403講義室に３人のパネリストと30人余りの参加者が集い、熱気あふれる交流を通して実践と研究をつなぐ大学院教育の未来について語り合い、展望しました。パネリストの高井今日子氏（聖路加国際病院）より「看護政策の視点から、政策参画などこれからの看護を決定していくもの」、深谷基裕氏（日本赤十字看護大学大学院博士後期課程）より「博士課程での学びをどのように臨床に還元し、よりよい看護実践を創出していくか」、中川有加氏（大阪赤十字病院）より「看護実践の場において博士の資質をどのように活かし、現場を改革していくか」について、大学院に進学した動機や博士課程での学びの経験を土台に今後の課題も含めてお話しいただきました。内容の詳細は次号に掲載されますので是非ご一読下さい。

★学会誌編集員会

学会誌が年３回の発刊となってから、２年が経過いたしました。2009年度は第１号（2009年３月）、第２号（2009年７月）あわせて、14編の論文を掲載することができました。会員の皆様より多くのご投稿を頂いていますことに、感謝申し上げます。

論文数の増加に伴い、より丁寧かつ迅速な編集作業が進められるよう、編集委員会の体制づくりを検討しながら、委員一同取り組んでおります。次号の締切は2010年１月末の予定です。ますますのご投稿ならびにご協力をお願い致します。

（担当理事　太田）

★庶　務

・去る９月26日に聖路加看護学会第14回総会を開催致しました。山田雅子理事長より、看護実践科学に根ざした聖路加看護学会の発展に向けた決意が述べられました。
・現在の会員数は563名です。昨年の同時期と比べ若干名減少しています。会員の皆様、周囲の方々にも本学会への勧誘をお願いいたします。
・皆様の勤務先や所属、住所などの変更がありましたら、本部事務局まで速やかにご連絡くださいますようよろしくお願い申し上げます。事務局への連絡は、郵便，Fax，E-mail のいずれかでお願い致します。E-mail address: slnr@slcn.ac.jp　Fax: 03-5565-1626

（担当理事：佐居由美　森明子）

★会　計

昨年度の会費納入率は90%という驚異的な数字でございました。みなさまのご協力の賜物と、心より感謝を申し上げます。

本日より、2010年度（2009年10月１日～2010年９月末日）の年会費納入の受付を開始いたします。当該年度の会費納入が確認されるまで、学会誌（No.２）の送付を控えさせていただいております。お心当たりの方、過去の納入がお済でない方は、本年度分とあわせて納入いただけると助かります（学会誌の発行回数が１回から２回に増えたため、年会費は2006年度より8,000円となっております）。

振込み先：郵便振替口座 00100-8-670371　加入者名 聖路加看護学会 です。

何かご不明な点などありましたら、Fax03-5803-0154か、kouko.rhn@tmd.ac.jp（大久保功子）にお問い合わせください。よろしくお願いいたします。

（担当理事：大久保功子）

編集後記

学術大会では、「ファーストクラス」を目指すためのさらなる一歩を踏み出す力を与えていただきました。

●発　行：2009年11月21日　●編　集：高木廣文　鈴木良美　小松優紀　●印　刷：㈱プリカ
●連絡先：聖路加看護学会事務局　〒104-0044　東京都中央区明石町10－１　聖路加看護大学内
電話　03-3543-6391（代表）　FAX　03-5565-1626（代表）　HPアドレス　http://slnr.umin.jp/